農林技術研究所だより

最新研究紹介

チャのスーパー品種「つゆひかり」の各種適性

静岡県農林技術研究所
茶業研究センター
茶生産技術科　上席研究員
片井秀幸

写真1　「つゆひかり」の一番茶新芽

1　はじめに

これまで、茶業研究センターでは数多くの特長あるチャ品種を育成してきました。その中に、水色が鮮緑で清涼感のある香りの「つゆひかり」があります（写真1）。この品種は、2003年に品種登録され、登録後から現在に至るまで、毎年栽培面積が増加し、2017年には97haと100haに迫る勢いにあります。

「つゆひかり」は、当初、普通煎茶に適性があると紹介してきましたが、その後、新たに、被覆茶、てん茶、有機栽培などにも適性のあることが当センターの試験により明らかになってきました。今回は、これまで得られた知見に基づき、「つゆひかり」の各種適性について紹介します。

2　「つゆひかり」の各種適性

(1)被覆期間と荒茶品質

「つゆひかり」は当初から、緑明るい色沢、緑きれいな水色と紹介してきました。さらに、近年、茶の品質向上を目的として増加している被覆栽培の適性を明らかにするため、遮光率85％の被覆資材を茶株面に直接被覆した試験を行いました（図1）。被覆栽培後製茶した荒茶を官能評価した結果、色沢、香気、水色、滋味は、被覆期間が長いほど評点が高く、特に「つゆひかり」の特長である水色と滋味が12日間被覆で向上しました。覆い香、覆い味は、9日間以上の被覆で見られるようになりました。このように、「つゆひかり」は被覆により品質が向上することから、被覆適性が高いものと考えられます。

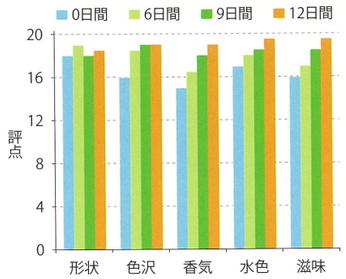

図1　被覆期間と荒茶品質との関係（2009年一番茶、鈴木）
※評点は各項目20点満点、直接被覆（遮光率85％）。

(2)蒸熱時間と荒茶品質

県内では浅蒸しから深蒸しまで様々な蒸熱条件で茶が生産されています。そこで、蒸熱時間の違いによる荒茶品質への影響を明らかにするため、送帯式蒸し機を用いて、蒸熱時間を45～120秒間処理し、試験を行いました（図2）。

処理時間別の荒茶について官能評価をした結果、45秒で形状、色沢、香気の評点が高かったものの、「つゆひかり」の最大の特長である水色と滋味を生かすためには、これらの特長が優れる90秒が望ましいと考えられました。

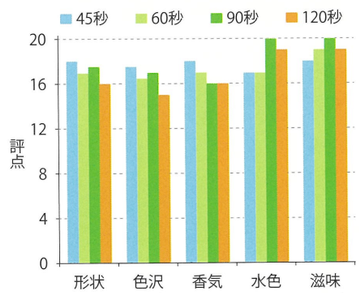

図2　蒸熱時間と荒茶品質との関係（2009年一番茶、鈴木）
※評点は各項目20点満点。

(3)萎凋香発揚適性

多様な香りを求める消費者ニーズに応えるため、県内でも、半発酵茶の生産が行われるようになってきており、近年、当センターでは、生葉の萎凋処理による「香り緑茶」の大量生産技術を開発いたしました（〈参考資料〉KEIZAIREN情報1238、2017、小林）。また、静岡県では、このような特徴あるお茶を「ふじのくに山のお茶100選」として認定し、生産・販売の支援に取組んでいます。

「つゆひかり」の萎凋香発揚特性を明らかにするため、萎凋処理した生葉を釜炒り製と蒸し製で製茶し、その荒茶を官能評価しました。その結果、「つゆひかり」の萎凋香の特徴は、上品な甘さで持続性を有し、優雅さを感じる花様の香りでした。また、二番茶の萎凋香も良好でした（表1）。

表1　一番茶、二番茶での萎凋処理した荒茶の香気の概評

萎凋時間	プラスの評価		マイナスの評価
	蒸し製	釜炒り製	
30	甘く上品、持続性有り、フルーティー	甘く上品、花香、フルーティー、優雅、さわやか	やや刺激的
60	甘く上品、持続性有り、甘くすっきり、ミルク臭、フルーティー	甘く上品、花香、フルーティー、優雅	やや刺激的、酸味臭、葉痛み臭

※鈴木（2009年）より一部抜粋

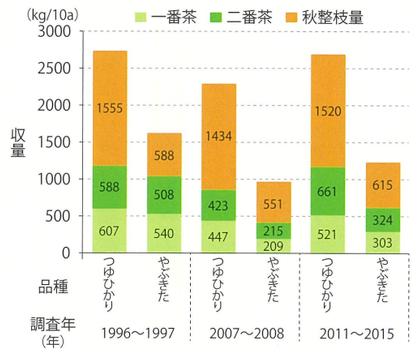

図3　「つゆひかり」の収量性

(4)その他の特性

近年、緑茶ドリンクの生産量が増加傾向にあり、このドリンク原料茶の生産には、多収性が求められます。多収性については、図3に示すとおり、「つゆひかり」はいずれの試験でも「やぶきた」に比べて大幅に優れており、ドリンク原料茶としても、「つゆひかり」は有望と思われます。

また、最近では、輸出向けを中心とした有機栽培や無農薬栽培が増加していますが、当センターが、有機栽培における病害虫の発生状況について現地調査した結果、全ての茶園で炭疽病が発生していることがわかりました（茶第71巻第4号、2018、小杉）。図4に示すとおり、「つゆひかり」は「やぶきた」よりも炭疽病の発生程度が低いことから、有機栽培にも適した品種であると言えます。

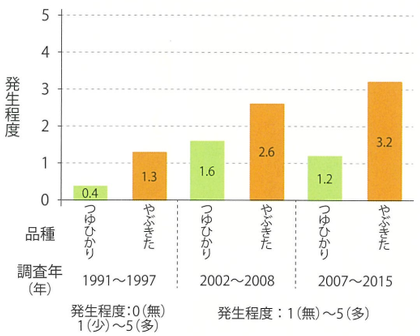

図4　「つゆひかり」の炭疽病発生程度

3　今後の調査計画

現在、国内外での抹茶需要の高まりから、県内でのてん茶生産が増加しています。このようなことから、「つゆひかり」を含む静岡県茶奨励品種のてん茶特性について調査を実施中で、得られた研究成果は逐次提供してまいります。

4　おわりに

静岡県内の茶園の約92％を占める「やぶきた」は、これまで静岡県の茶産業に多大な貢献をしてきました。しかし、近年、求められる茶の用途が多様化し、水色がより優れた品種や、ドリンク原料茶としての多収性品種、また海外輸出を含めた有機栽培や無農薬栽培等に対応する品種が求められています。

今回、紹介しました「つゆひかり」は、これら様々な用途に対応できるスーパー品種であり、また、やや早生であるため作期の拡大も期待できます。昨年、県内の茶苗出荷本数は「つゆひかり」が第一位であり、生産者の期待の大きさが伺えます。今後も、茶改植する際には、「つゆひかり」の導入を御検討いただければ幸いです。さらに「つゆひかり」について詳しいことを知りたい方は、お気軽に茶業研究センターまでお問い合わせ下さい。

〈参考資料〉
（あたらしい農業技術No.521、2009、鈴木）
（あたらしい農業技術No.583、2014、鈴木ら）など

菊川市倉沢1706
静岡県農林技術研究所
茶業研究センター　茶生産技術科
ES-kenkyu@pref.shizuoka.lg.jp